

UNDER BLUE

ashitakaextra

UNDER BLUE

ボクは宇宙を見つめていた。限りないはずのこの空を。この広がる世界を。

手を広げて空にかざせば、未来が少し広がった気がした。光の先にボクたちがいることを、あの光の主は知っているのだろうか。少し広がった世界には、新しいものはまだ見つけられていない。

記憶を巡っていく。過去には、いいことのほうが多いのだろうか？未来は絶望に満ちているのだろうか？

流星たちの故郷は、太陽系の外を囲んでいるオールの雲と呼ばれるところである。そこには、星々が、流星にならずに、たたずんでいる。生命の、この僕たち生命の源を含んで。

言葉にならないことたちが、おそらくはまだまだこの世界には潜んでいる。そんなものたちをボクは探していた。そんなものたちにボクはこころ引かれている。あの穹の果てにはそんなものたちがうごめいているのだろうか？もしかすると、ボクという言葉のありふれたところにあるもので表せるものかもしれない。

少し昔に、エドウィン・ハッブルという人が、望遠鏡で星を観察した。今ではその人の名前をついた望遠鏡が空に浮かんでいる。空は広くて大きいから遠くを見渡すものが役に立つ。

ボクの思う星は、美しく輝きそしていつしか去っていく星だ。

終わり。